

令和7年度データサイエンス教育プログラムに係る自己点検・評価

学内からの視点	自己点検・評価における結果・意見
<p>観点1 プログラムの履修・修得状況</p>	<p>令和4年度以降、1年次・2年次とも全学必修（履修登録100%）とし、履修者個別の進捗状況や課題提出状況を把握するとともに、習熟度分析に基づく学修支援や補習を実施し、単位未修得者を3%未満に抑えることを目標としている。令和7年度の単位未修得者割合は、1年次科目平均約7.9%、2年次科目平均約7.0%となった。1年次科目における単位未修得者割合は前年度より上昇し、改善には至らなかった。特にDSIIIでは未修得率が10%を超え、学修定着の難しさが顕在化している。この点は課題として認識しているが、1年次においては自律的な学修態度の確立を重視し、一定の負荷を課す運用を行っており、その影響が結果に表れている側面もあると判断している。今後は、この結果を踏まえ、学修姿勢に課題のある学生への早期アプローチを強化し、令和8年度の2年次（DSIV以降）における立て直しにつなげていく必要がある。一方、令和7年度の2年次における単位未修得者割合は前年度と比較して改善が見られ、個別支援や早期アプローチの強化が一定の成果を上げている。また、1年次に導入したアドバンスクラスでは、履修学生の多くが高い学修意欲を維持し、良好な成果が確認されている。令和7年度には2年次にも同クラスを導入し、上位層のさらなる伸長を図る体制を整えた。今後も、各学年の特性に応じた支援を強化し、単位取得率の向上および学修の質の向上に努めていく必要がある。</p>
<p>観点2 学修成果</p>	<p>令和7年度の1年次・2年次の最終成績（DSIII、DSVI）は、DSIII・DSVIそれぞれにおいて、AA 16.1%・14.5%、A 30.3%・33.5%、B 29.8%・32.3%、C 12.5%・14.5%、D 8.0%・1.7%、Z 3.4%・3.6%であった。令和6年度と比較すると、1年次（DSIII）においては、AA 割合が増加（14.8%→16.1%）し、B 割合も大きく上昇（23.4%→29.8%）している一方で、C 割合は大幅に減少（24.3%→12.5%）している。これは、主体性を重んじた運用により、従来C層に位置していた学生が上位層へ移行する一方で、一部は下位層へと分かれるなど、学修成果の二極化が進んだ結果と捉えられる。実際にD割合は増加（3.9%→8.0%）しており、個々の学修態度の差が成績に明確に表れたといえる。2年次（DSVI）においては、AA 割合が増加（11.9%→14.5%）し、D 割合は減少（2.5%→1.7%）していることから、上位層の伸長と下位層の縮小が同時に進んでいる。A 割合はやや減少しているものの、B 割合が増加しており、全体として安定的に学修成果が向上している。以上より、1年次の第4QT（DSIII）では主体性を重視した学修環境のもとで成績分布の二極化が進行し、その差は個々の学修態度に起因するものとして顕在化した。令和8年度は1年次において早期から自律的な学修態度を習得させることが鍵であり、初期段階での行動定着に向けた働きかけを強化する必要がある。あわせて、学修態度に課題のある学生への早期介入を徹底し、中位層の上位移行を促進することで、2年次以降における安定的な学修成果の向上につなげていく。また、正課履修後の資格取得に向けた令和7年度夏季特別プログラムには延べ242名が受講し、158名が受験、148名が合格した（受講者に対する合格率61%、受験者に対する合格率94%）。継続課題であった統計検定3級の合格率は、令和5年度春の25%から75%へと着実に改善している。加えて、データ分析を活用し</p>

	<p>た外部コンテストには2・3年生の有志チームが参加し、「学生によるミタカ・ミライ研究アワード 2025」において5年連続で優秀賞を受賞するなど、学修成果を発展的に活用する動きも継続されている。一方で、2年次までに修得した知識・スキルを、3年次以降の専門的な学びへどのように接続・発展させていくかが、引き続きの課題である。</p>
<p>観点3 学生アンケート等を通じた学生の理解度</p>	<p>科目終了時の授業評価アンケートでは、「到達目標達成度」は5段階評価でDSⅢの科目平均(4.35)、DSⅥは(4.23)であった。授業振り返りアンケートに基づく知識理解・活用力の達成度評価では、「十分理解・習得できた」「大体理解・習得できた」と回答した学生の割合は、1年生90.4%、2年生87.6%であった。補習も5年目に入り、データサイエンスラーニングコモنزの認知度も向上し、データサイエンス科目の相談やPCトラブル時に訪問する場として定着しつつある。また、LMS (UR-note) は運用3年目となり、自主学修用の問題量を増やし、難易度の幅も広げた。結果として、85%以上の学生が安定して利用しており、授業振り返りアンケートのDSⅢの自主学修に関する評価では「非常によかった」「よかった」と回答した学生の割合も95.1%と高いスコアを維持している。UR-note 導入時に多く見られた自主学修問題に関する改善要望も大きく減少したことから、一定の満足度が得られ、学修支援の充実につながっている。今後も、授業内容、教授法、教材の改善を継続し、高等学校での情報教育の変化を踏まえながら、学生の理解度と社会が求めるスキルの両方を考慮した授業の難易度設定を検討していく必要がある。</p>
<p>観点4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度</p>	<p>科目終了時の授業評価アンケートおよび授業振り返りアンケートにおいて、DS 科目の「今後の学修や人生における有用度」は5段階評価でDSⅢの科目平均(4.54)、DSⅥは(4.29)と高評価であった。本プログラムでは、修了生をSAとして雇用し、後輩への学修支援を行う体制を継続しているが、令和7年度も約50名のSA希望者があり、令和8年度もほぼ同様の希望状況となっている。このことから、SAが受講学生にとって目指すべき学生モデルとして機能している。また、クラス内の学修支援において、高学年SAによる新人SAへのOJTが、学生主体で実施されるようになってきている。このOJTプロセスを今後より体系的に整え、SAのリーダーシップ開発やキャリア開発につなげるため、令和6年度から「シニアSA」制度を導入したが令和7年度は、3・4年生の11名がシニアSAとして、学修支援の強化とともに、SAの育成指導を担い、ロールモデルとして活躍した。令和8年度も、SA制度の発展とともに、学修支援の質を向上させ、学生同士の学び合いをより促進する環境の整備が求められる。今後は、シニアSAの育成強化に努めることで、より効果的な支援体制の確立と、学修支援の持続的な発展を図ることが重要である。</p>
<p>観点5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>本教育プログラムは必修科目として位置付けられており、単位取得率100%の達成を目標としている。授業運営においては、LMS (UR-note) を活用し、学生個別の出席状況、課題提出状況、小テスト・定期テストの結果を設問単位・クラス単位・学科単位で集計・分析し、DACチーム会議において共有している。これに基づき、チューターおよびSAによる授業内外での学修支援や個別面談を実施し、単位取得に向けた支援体制を整備している。令和7年度のDSⅠ～Ⅵにおける単位修得率は93.6%となり、「単位未取得学生3%未満」という目標は未達であった。特に1年次においては、QT</p>

		<p>の進行に伴い単位未取得率が上昇する傾向が見られ、出席率が低下する 1QT から 2QT にかけての学修行動の変化が課題として顕在化している。これは、学修支援体制の問題というよりも、主体的な学修に対する認識や行動の個人差が結果に影響していると考えられる。この結果を踏まえ、令和 8 年度に向けては、1 年次において早期からのマインドセットの形成を重視し、それに対応した働きかけを体系的に実施する。高校と大学における学修方法の違いを早期に認識させることで、自ら学修行動を変容させる取組を促進するとともに、学修態度に課題のある学生への早期介入を徹底する。また、2 年次においては学科との連携を一層強化し、学修意欲の向上を促す施策を継続・発展させることで、履修の質の向上と単位取得率の改善を図る。</p> <p>今後は、LMS を活用した学修状況の可視化と早期対応をさらに高度化し、学生の自律的な学修態度の形成を支援することで、履修率および単位取得率の向上につなげていく必要がある。</p>
学外からの視点		
	<p>観点 6 教育プログラム修了者の進路、活動状況、企業等の評価</p>	<p>本年度においては、キャリア支援部門との情報共有や企業からのフィードバックを踏まえ、本プログラムで修得したデータ活用力や課題解決力が、進路選択や就職活動において一定の評価を得ていることが確認されている。また、産官学連携先（日本ケンタッキー・フライド・チキン、まいばすけっと、三鷹市、ソフトバンク）からは、学生の提案内容について「年々レベルが向上している」「興味深い分析結果が複数見られる」などの評価を継続して得ており、実データに基づく課題解決型学修の成果が着実に蓄積されている。さらに、受講者有志グループが「ミタカ・ミライ研究アワード 2025」において優秀賞を受賞したほか、SA から 2 名が Tableau Academic Ambassador に選出されるなど、学外においても本プログラムの学修成果が高く評価されている。今後は、進路データの体系的な収集・分析を進めるとともに、こうした外部評価や成果事例の可視化を通じて、教育効果の検証とプログラムの質向上に一層つなげていく必要がある。</p>
	<p>観点 7 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムの 2 年次科目は、産官学連携教育プログラムとして、企業等の実データを活用し、課題探究・解決型の教育を実施している。連携先と教員が意見交換を重ねながら授業準備を進めており、内容・手法についても、連携先からの意見を反映した改善・工夫を行っている。また、本学のキャリア支援部門による企業訪問等においても、本学のデータサイエンス教育における産官学連携の取組や、プログラム履修学生の学修成果に対して高い評価を得ている。令和 7 年度は、新たに日本ケンタッキー・フライド・チキンおよびまいばすけっととの連携を開始した。学生にとって身近な企業の実データを活用することで、分析対象を「自分ごと」として捉えやすくなり、社会の課題を主体的に発見・解決する力の育成につながっている。また、企業側にとっても、将来の人材育成を見据えた教育支援の一環として本取組への期待は高く、実践的な学びの場としての価値が双方において認識されている。今後は、企業や自治体が求める資質・能力と、本プログラムで修得する資質・能力との関係をより明確にし、直接・間接の適切な評価を進めることで、さらなる教育プログラムの質向上につなげていく必要がある。</p>
	<p>観点 8 数理・デー</p>	<p>令和 7 年度も前年に引き続き生成 AI の特別講義を 1 年次には 2 回、2 年次には 1 回</p>

<p>タサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>組み込み、時代の変化に即した学びを提供した。1年次の2回のうち1回はハンズオン形式とし、実際に生成AI（ChatGPT）の基本操作やプロンプトの重要性について学ぶ機会を設けた。2年次では、産官学連携を通じて、実際のデータ分析から課題解決に取り組むことで、理論と実践を兼ね備えた学修プロセスを経験する構成となっている。最終的に、連携先からプレゼンに対するフィードバックを受けることで、学問的な知識だけでなく、実務での問題解決方法やプロジェクトの進め方など、社会で求められるスキルや考え方を理解できる仕組みとなっている。科目終了時の授業評価アンケートでは、「授業に真剣に取り組んだ」という項目の5段階評価が、DSⅢは(4.59)、DSⅥは(4.52)と高評価を得た。また、授業振り返りアンケートでは、「自分が一から作ったプレゼンを評価され、フィードバックをもらうことに楽しさや達成感を感じ、この分野に興味を持つことができた。」「着実に自分の能力が身についていく実感を得ることができ、とても楽しかった」などの声が寄せられ、学生の興味・関心・理解が深まり、成長実感とともに意識が変化していることが伺える。今後も、データサイエンスや生成AIを正しく活用した実践的且つ最新の学びを強化し、「学ぶ楽しさ」と「学ぶことの意義」を実感できる教育の継続が求められる。</p>
<p>観点9 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>授業のリフレクションや提出物、小テスト等の結果を踏まえ、習熟度・理解度の低いテーマについては授業外での学修支援を行うとともに、次回授業において補足説明を加える運用を定着させている。これにより、個別の理解状況に対応しながらも、授業全体の進度や水準を維持することが可能となっている。また、授業構成については、文系学生においても理解が進むよう、理論と実技を往還する形式を継続して採用しており、単なる知識理解にとどまらず、実践的な活用力の定着を図っている。授業後の授業評価アンケートにおいては、「学生の目標達成に対する教員の意欲」を問う項目で、DSⅢが科目平均(4.60)、DSⅥが(4.54)と引き続き高い水準を維持していることから、こうした授業運営が一定の評価を得ているといえる。今後は、新学習指導要領世代の入学に伴う学力・学習経験の変化を踏まえ、現行の授業設計の有効性を検証しつつ、カリキュラムの内容および水準の最適化を進めていく必要がある。</p>

以上

令和8年3月6日(金)

令和7年度第2回大学自己点検・評価委員会